

<Q15> 総科生についての印象は？(他学部生のみ)

- ・一般的な教養だけ身につけて、将来何になるのか? ・恵まれている ・暇そう
- ・個性的な方が多いようで・・・
- ・奇人・変人の集合体 ・バカが多い
- ・何をやってるのかさっぱりわからん
- ・悪いえば寄せあつめ、良いえば幅広い知識を持っている
- ・バレンシアオレンジ
- ・非常に興味ある学問をやっている学部の学生だと思います
- ・ダサイ、気持ち悪い、醜い
- ・「総合科学」ってどっちつかずのこもりじゃないの? よくわからんというのが本当だけど
- ・まともに勉強しとる者が少ない
よくしゃべり、よく眠る
- ・女がいるので大変良い(工学部)

将来の流動性に培ける総科生

集計結果を振り返ってみよう。まずQ1においてさっそく総科と他学部との違いが顕著に現われてくる。Q1の質問の「総科」のところを「あなたの所属学部」として、他学部生に聞いたところ、ほとんどの人はやりたいこと好きなことがその学部にあるからだと回答しているのに対し、総科生は「総合科学」に対する漠然とした憧れや今後の道の広さなどもけっこう理由としている。Q1をQ2に関連させて考えてみると、他学部生は明確に将来を見据えているのに対し、総科生は種々雑多、特に女子の未定が目立っている。総科生には総科特有の『流動性』が感じられるようだ。

まとまった自主性に富み・・・

Q2において、「自主的」「まとまり」「軽さ」などの項目に注目してみると、総科の特徴がわかるようだ。他学部より「満足している」結果になったことは、非常に喜ばしいことだろう。

貪欲な知識欲はあるが・・・

Q7で総科生のトップが「読書」、2位が「勉強」というのも非常に興味深いことである。他学部の「サークル活動」「遊び」とははっきり対をなしている。総科生には、様々なことに対する貪欲な知識欲があるのだろう。また、「何をやろうとー」の問いに、「やろうと思っていたのだが・・・」のかげりのニュアンスが感じられるようにも思われる。

講義もよくサボリ・・・

Q9では、Q15で他学部生の「まともに勉強しとる者が少ない」との御指摘通りの結果が出た。他学部生によく知られていないのでは・・・

Q15では総科生をよく知らないという意見が割合に多かった。学部間の交流があまりないようである。とくに、総科生には、「総科ファミリー」的な意識があるのだろう。総科に対する誤解も多い。他学部との接触、相互理解が必要だろう。

総科生の印象としては、文学部を除いては、概して印象が悪い。(これからは文学部と仲良くしよう!) 期待はずれのとまどいを越えて・・・

Q13の質問は、問いが漠然としていたことや、特に(E)進路、進学など、現時点では答えにくい面もあって、良い資料が得られたとは言い難い。しかし、いずれも、入学後、「期待に反して現実は・・・」といったとまどいを呈している。入学前は未知の部分の多い学部であったため、期待度が高かったこともあるだろうが、学校当局、そして誰よりも僕たち自身が、真剣に総科のあり方について考えていく必要があるだろう。

総科には、主に男子は(A)専攻の学問分野を、女子は(B)総合的人間形成、(C)学際領域、(D)入学後の学問分野を期待して入学してくるようだ。特に、(C)の学際領域への女子の期待度は高かった。(E)進路、進学については、最初からあまり限定的に期待していないようだ。学際的・総合的な研究を主とする総科の特色からいって、「学ぶ」ために入学してきたと解釈すればよいことなのかもしれない。

総科生の自覚を・・・

以上のように「総科」を大まかに探ってきたが、「総科」の様々な特色を生かすのも、殺すのも、僕たち総科生一人一人にかかっているといえるだろう。



テニス・ブーム

テニスは楽しい
陣崎克博

「Tennis crazy では自慢していましたが、先生が現われてからは負けそうです。ストレートの強打を防ぐ手は何かといつも考えているのですが、仲々特効策がありません。」教育学部の羽生さんから頂いた今年の年賀状である。流石に心理学の先生、ウマイことをおっしゃると感心し恐縮しチョッピリ悦に入って、スクラップ・ブックに貼りつけた。その下には、工学部の浜村さんと組んでHTC杯争奪戦(昨年10月)の予選リーグで優勝したときの写真



が添えてある。

◇ ◇
ゲームの世界では、多かれ少なかれ皆テングである。書き出しの部分にかいま見られるように小生とて例外ではない。さてその小生をはじめとして、総合科学部の自信に満ちた教職員が昼休みにはコートに満ちあふれる。All-round playerでミスが少なくクロスのスロークに牙えを見せる式部さん、ヴォレーとサイドを抜く球が抜群の山田さん、ゆるいサーブを強打のエイズで返しコートマナーが最も陽気な松本さんの三人は、年長組で貫禄十分である。川村さんなど保健体育の諸先生、天野実さん、内山さん、学務第一係長の高井さんは、その昔勇名を馳せた伝説上の人物であるが、あまり昼のコートに姿を見せられないので、サッパリ実力のほどが解らない。紙上を借りていつか胸を借りたいと挑戦しておこう。

素姓がよく解っていてやっぱり一番上手なのが荒井さん、それに次いで洗練されたマナーの小村さん、昨年の式部杯優勝者山口さんと岡崎さんであろう。キビキビとした近代のテニスのために生まれてきたような爽やかな水島さん、確実さと運動神経の鋭さと手首の返しの強さで随一の江口さん、ヴォレーと頭腦的プレーと評論家の素質で定評のある森さん、フ

ォームの良さと鋭いボールで群を抜く福居さんと木本さん、シューアで独特のヴォレーで得点を重ねる内海さんと松田さん、基本に忠実でノーブルなコートマナーの甲斐さん、月間進歩賞もので研究心旺盛の武田さんと福嶋さんなど多士済々である。それに他学部の教職員、学生諸君の有志が加わって、昼休みのコートは正にけんけんごうごうしかも春風駘蕩、白球交錯して百花繚乱たる状況である。

その技術的平均水準は決して高いとは言えない。



しかし成長期の学部の燃焼するエネルギーの背後に潜むフラストレーションを解消し、式部学部長のスローガン「和気あいあい」の実現に大きな役割を演じていると申して過言ではあるまい。

◇ ◇
小生、40代の半ばから数年間、胃腸の調子が悪く、朝起きにくく、いつも体がなんとなくだるくて仕事への意欲も湧かず、元気がない状態が続いた。大病院での精密検査も異常なく、運動不足ですよと言われても、悪循環でなかなか運動に踏み切れないでいた。それが、なにが端緒であったか、一昨年の11月テニスを再開することになったのである。再開後5日目にしてギックリ腰になっても挫けず、今日まで続けたのが良かった。今やテニスのおかげで快眠・快便、すこぶる体調が良く、気分爽快で、なにをやっても面白い。最近は人生が楽しくて楽しくてしかたがないのである。

60になっても70になっても続けるぞと、今日も「冷水」と冷やかされながら、一球一打に精神を集中し、テニスの心技向上が研究の促進に寄与し、研究の進展がテニスの進歩に貢献する相互作用を確信し、気品あるアマ・プレイヤーとなることを目指して、コートのかなかを駆けずり回っているのである。

(英米研究・教授)

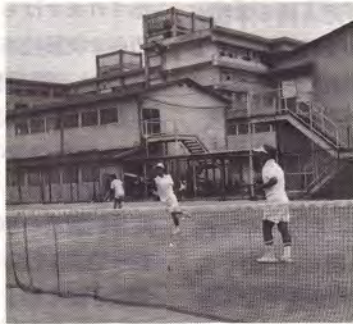
あおぞらのなかま
森 利一

最近、テニスが全国的ブームだそうで、またわが総合科学部でも教官の愛好家が増えている。この現象をとらえて編集子が文章を書くようもとめてきたが、正直なところ弱った。“下手の横好”ということしかとりえのない私には指折り数えて、30名近い教官が白球を追うようになっている事実



に改めて、驚かされると同時に、決して若くはない人々をしてコートに誘い出している魅力はなんなのかと思っしばし考えてしまったのである。さらに、この依頼には皮肉もこめられているのではなからうかとの邪推さえ浮かぶ……いん年をしてコート狭ましと動きまわって……などと。

私は私の無様なプレーぶりを見ることはできないが、教官仲間のプレーには力強さとかたくましとかの表現が当てはまることはまずない。若い諸君には、もたもた、やっているようにみえるかもしれないが、お互い結構、真剣にやっているのである。技術の秀れたプレーヤーならば、ラインぎりぎりねらったということから判定がきわどく、もめることがあるが、われわれの場合でも判定がもめることがある。たゞし、ごく稀な場合をのぞいて、たまたまボールの落下した位置がきわどかった、という偶然の所産としてである。なかには、上達著しい人もいて、意志と技術が結びついているけれども、私などは意志とボールの行き先きとは時の運という“ひどさ”である。それでも、本人は大真面目なのである。



そんな私の、そしてわれわれのテニスを巧みに正当化できるキャッチフレーズはないものか。そんな矢先に小さな新聞記事が目にとまった。それはジョ

ギングとランニングの違いを説明したものであった。この記事によれば、日本人は多分に両者を混同しているという。私にしてから、ジョギングということばをカーター大統領の訪日を契機に知った次第で、「とぼと歩く・のろい」という語意をもつ jogging から、大統領はゆっくり走るのだから位に思っていた。しかし、アメリカでは明確に区別されていて、ジョガーは「健康増進を目的にし、人との触れあいを期待して走る人」であり、ランナーは「走ることそのものが目的の人」である、とのことである。

この伝でいけば、われわれのテニスはジョギング流ということになる。私なりに改めて考えてみると、硬式テニスのおもしろいところは、正確なショットとインパクトに心掛けるならば、非力な人でもそれなりにプレーができるところにあるといえよう。いゝかえると、軟式テニスは若者のもつ素晴らしいパワーがないとついていけないであろうが、硬式テニスは相手のパワーとスピードを巧みに転じうる技術を身につけるならば、対応できるスポーツである、と思われる。硬式テニスのこうした特性が多く教官に伝えられ、また実際にやってみて、今日の盛況につながっているのではなからうか。それは健康維持にも役立つことは間違いなく。

シングルスは体力の消耗を急速にまねき、かつコートの利用効率という点からも、なじまず、ダブルスが好まれている。まさに、われわれは、ランナーではなく、ジョガーではないか。題して、「ジョギング流テニス」にしようかとも考えた次第である。

もっとも、ゲームで勝ち負けを競うのも楽しいことであるが、「ジョギング流テニス」が人との触れあいを期待する以上、マナーがまず、まもらなければならない。そして、触れあいを期待される品格がめざされねばならないだろう。“隗より始めよ”

ということばの苦さをかみしめて筆を擱く。
1980. 6. 2 (社会文化研究・助教授)

< シリーズ・その11 >

学問のススメ

量子力学の学習について

松田 正典



今日、量子力学は、物理学研究のみならず、量子化学、分子生物学更には地学の微結晶学的研究等々、多方面の基礎科学研究に重要な役割を果している。学際領域の研究の発展は、一つは社会の時代的要求に応えるという形でうながされるのであろうけれども、一つは純粋に研究上のモチベーションによって起る。殊に基礎科学研究の学際領域においては、より詳細な探求は微視的な観点からの研究という形で発展して来た。勿論、情報科学による統計的研究の発展ということもあるが。量子力学が微視的な世界を記述するダイナミクスとして研究の理論的基盤となることは今後一層深まって行くことだろう。従って、化学者のポーリング博士のように、量子力学を充分使いこなす生物学、地学の研究者を育てるということは、研究者養成の一つの課題であろうと思われる。総合科学部こそこの課題に応えねばならないし、応え得る体制が既に作られている。しかし、レンガを積み重ねるように、力学—熱学—電磁気学—物理数学—量子力学と順を追って教育して行く従来のカリキュラムを、生物系化学系の学生に覆習させることは当抵できることでない。

京都大学の類人猿の研究の報告に、海水で芋を洗うといった従来その集団に無かった新しい行動(知識)をあみだし、その群の慣習として定着させる機縁を作るのは、常に子猿のグループだとあった。

理論研究は相当に熟練を要するので、自分のマスターした理論及び計算技術とはきわだって違う理論等には、どんな頭のやわらかい者でも極めて強いアレルギー反応を生じ安い。新しい理論、従来のものときわだって異なる計算技術等をいち早く

吸収し活用し始めるのは若い研究者である。この点人間の場合も、複雑な新しい情報の吸収には、若い頭脳が必要とされるのであろう。量子力学の覆習についても、従来のカリキュラムの型にとられることなく、いきなり量子力学を学習し、必要に応じて理解に不足する基礎知識の学習を補って行くという型での取り組みが可能だと思われる。授業を担当する者には、これははなはだやりにくい感があるが、学生に“やる気”さえあれば必ずある程度の所までは行けるだろう。途中で脱落されてはいたしかたない。

ちなみに量子力学の学習に最低限必要とされる基礎知識は、振動波動論、解析力学の初歩、物理数学の一部(線型微分方程式及び行列式の固有値問題、球関数、円筒関数)である。

以上は私の授業を受けている学生の求めに応じてしたためた私の所感であるが、終りにもう一言書き添え度い。量子力学の学習は、完成されたものゝ学習に止まらず、量子力学の完成への途上に次々と創出されたすばらしい着眼とそれを具体化する驚く程巧みな実験技術の積み重ねを学ぶことが大切だと思われる。学際領域の研究を志す人には特に意義があると思う。何しろ1オングストローム(10^{-8} cm)のオーダーという肉眼には遠く及ばない微視的世界の構造を、限られた少い情報を下に定性的に推求し定量的観察の手法をあみだし実証に基づいて理論を組み立てて行った研究の歴史なのであり、これを前期量子論というが、人間の英知がふんだんにちりばめられ、科学研究を志してこれを学ぶ者の胸をふくらませて止まないものがある。私は、環境科学研究コースの共通必修科目に“前期量子論”を入れるべきだという意見を従来から持っている者である。

(基礎科学研究・助教授)

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 総合科学部 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

同窓会の設立について

重 中 義 信

各種学校や大学の同窓会なるものは、日本中どこに行ってもあるらしい。現在、わが総合科学部でも、遅ればせながら同窓会が発足しようとしている。そこで、私はこのような同窓会を設立する意味というか、存在意義というか、兎に角、それについて改めて考えてみた。まず最初に、同窓会という組織があれば、同じ学び舎で苦楽を共にして来た者同志が、それを通じて、何年か経った後にも再会することができ、過去・現在そして未来の時の流れについて語り合うことができるという利点がある。また、同窓会名簿があれば、それによって懐かしい先輩さらには後輩の消息が判り、お互いに緊密な連絡や文通を再開できるという利点が挙げられる。さらには、お互いに適齢期の息子や娘をもつ年配になった時、また、教え子が卒業するようになった時、就職や縁談の話ができるかもしれない(これは不純かな?)。同窓会のあり方については、各人各様の考え方もあろう。しかしながら、誰しも昔は懐かしいものであり、心の寄り所としての場が欲しいものである。その意味でも、同窓会の果たす役割は大きいものである。

私は昭和30年3月に広島大学理学部生物学科を卒業した。従って、尚志会という名の同窓会の一員である。卒業した当初は若さに溢れ、その後も引き続いて大学院理学研究科に進学したためか、余り、同窓会の意義について考えたこともなかった。しかし、10年そして20年と経ってくるにつれ、当時の友人諸君のことが無精に懐かしく思い出されるようになって来た。「彼は今頃、どこでどうしているのかな」という調子で、尚志会の発行する会員名簿をかなり頻繁に開いてみるようになった。これは、どうも私一人ではないらしく、私の友人達も会う度毎にその話をし、彼等が広島に出張して来た折には、必ずといってもよい程、私の研究室に立ち寄ってくれる。逆に、こちらが出張で広島を離れる際には、その土地にいる同窓生と連絡をとり、時間の余裕さえあれば一緒に飲みながら昔談義をするのである。先き程述べたように、私達は昭和30年の卒業生であるから、今年が25周年すなわち4半世紀の記念すべき年にあ

たる。そこで、私が世話人となって、このお盆明けに湯来温泉に一晚泊りがけのクラス会を計画してみた。そして、30人余りのクラス・メートに案内状を送った所、なんと、その殆んどが参加するという返事をくれたではないか。これには計画した私自身、本当に驚いたが、このことは25年振りに広島土地で同級生に会えるという喜びが如何に大きいかを如実に示していると思われる。もちろん、私達の年代になると、子供達から手が離れつつあるという事もあるが…。いずれにしても、今から待ち遠しいという添え書きまで貰うに至っては、世話人としても冥利につきるというものである。

さて、話変って、我等が広島大学総合科学部も昭和53年3月に第1回卒業生を送り出してから、今年で、もうすでに、第3回目の卒業生も送り出した。ここで、総合科学部同窓会設立の活発な動きが起ったとしても決しておかしくないし、早過ぎもしないと思う。お蔭で、広島市内や近郊に居住する卒業生諸君や在学生諸君も本格的にこの問題に取り組むようになり、総合科学部同窓会設立準備会も4月12日に発足することができた。ここに至るまでには、いろいろと紆余曲折があったやに聞き及ぶが、昨年度の学活委員長であった今中先生が音頭をとられて、同窓会設立の準備を開始された。そして、本年の2月27日、国際ホテルで開かれた総合科学部卒業祝賀会において、この計画が正式に披露された訳である。さらに、その席では、幾人かの卒業生諸君の参加があり、新しい卒業生に対する祝辞も貰うことができた。その結果として、翌々日の2月29日に同窓会設立準備会のための準備会という非公式の会合をもち、同窓会設立の意義、発足後の諸問題などについて忌憚のない意見交換を行った。さらに、これが発展して、4月12日に第1回設立準備会が開催され、それには卒業生7名と在学生9名の計16名が参加し、オブザーバーとして教職員8名が加わった。その席上、本年度中に同窓会が発足できるよう準備を整え、発足の時期を来たる2月下旬に開催予定の卒業祝賀会に合わせる事が決議された。さらに、卒業生6名と在学生2名の計8名の世話人が互選され、